町長ひとりごと ⑲

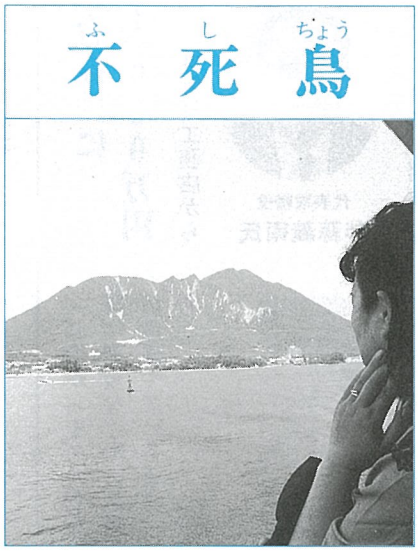
斉藤 譲

北海道南西沖地震は各地に悲惨な災害の爪跡を残した。特に、震源に近い奥尻島は壊滅状態となった。激震とその直後に襲った大津波は、多くの建物を倒壊させ、二百数十名にものぼる尊い人命を一瞬のうちに土砂の下や波間に呑みこんでしまった。残った家屋も瞬く間に猛火につつまれ、跡形もなく焼き尽されて一面廃墟と化した。島ではどの家も厳しい冬に備えて重油タンクを軒先に置いているため、不幸にもこれに次々と引火し爆発を誘発したということである。テレビ画面は懸命にホースを伸ばし、消火をしようとする人々の悲壮な姿を映し出していた。しかし、その努力も天を焦し荒れ狂う猛火の前には、結局為す術もなかった。「放水止め、放水止め」という悲痛な叫び声が、紅蓮の炎の中に空しく消えていった。恐怖、混乱、悲嘆の渦巻く現場の映像に、引きつり、狂乱し、あるいは放心した顔がいくつも浮かんでは消えた。地獄絵さながらの惨状に心も凍った。

「神よ、なぜにこんなにも酷い仕打ちを…」と恨まずにはいられない。

▼「天災は忘れた頃にやってくる」という諺もあるが、この島の人達の多くは、十年ほど前の日本海中部沖地震の際に受けた津波の教訓を忘れてはいなかった。地震発生と同時に「津波が来るぞ、逃げろ！」の声があちこちで起り、着の身着のままの格好で高台に逃がれ間髪のところで助かった者が多いと聞く。それにしても津波の襲来は想像以上に速く大きかったようだ。高いところでは三十メートルを超えたともいう。バリバリと建物を砕く不気味な音をたて足下に迫り来る津波の凄まじさと恐ろしさに生きた心地がしなかったとみんなは口を揃えて語る。「婆さんが、目の前で波にさらわれて行ってしまった」と年老いた夫は肩を落す。区長だという人がインタビューを受けていた。役目柄役場と現地の連絡、対応に追われ憔悴しきっている様子であった。最後にその口から、「嫁さんと孫の遺体が早く見つかればいいと、今はそのことだけを願っています。」と重く沈んだ一言がこぼれた。彼が目を遣るその彼方には、まるで何事も無かったような穏やかな海がひろがっていた。

▼六月の上旬「町民空の旅」で西九州に出かけた。その折、島原の港から熊本まで船路をとった。島原の街は降り続く雲仙普賢岳の火山灰で、どことなく白茶けて埃っぽかった。車窓から見る避難民の仮設住宅は、いかにもその場凌ぎといったバラックで、まるで押し込められたように窮屈に棟を並べていた。その辺りにも薄っすらと白い灰が落ちて、二年を超える長い避難生活の苦労が偲ばれた。船のデッキから離れゆく島原の街をふり返えれば、ちょうど噴煙をあげた普賢岳から真っすぐに火砕流や土石流がつくった赤茶けた太い流れの道が海に向って落ちていた。その途中には埋まったり流出した家屋らしきものが肉眼でも見えた。あまりの凄ましさに息を呑んだ。そして土石の堆積するこの荒漠たる情景に賽の河原を連想した。船が白い航跡を曳くこの海原は、あくまでも青くそして、波静かだ。いまこの島原の海と陸は、天国と地獄を分けていると思った。



▼産経新聞の「産経抄」にこんな内容の記事が載った。

雲仙噴火と北海道地震の被災者の悲惨と酸苦は同じだが、対応には幾分の違いがあるようだ。対照的という程ではないが、歴史と風土の差、あるいは農民と漁民の差というものかもしれない。雲仙の人々は度重なる火砕流や土石流に家屋を焼かれ、田畑をだめにされた。それでもなかなか家郷を捨てようとしない。一方、奥尻島では、「もうこんな土地には住めない」と涙の決意をする人がでているという。

以下筆者は、噴火と地震という自然災害の差と共に、雲仙は島原の乱や〝島原大変〟の大惨事を乗り越える中で、お互いに助け合う人情や土地への愛着も生まれたと言う。一方、奥尻は明治まで〝化外の地〟とされ、伝統や因習もない新天地であり、有島武郎の『カインの末裔』そのまま、新取と開拓の精神の持主が多かったと歴史的な差を語る。そして最後に雲仙と奥尻の違いは、陸に生きる人と海で生きる人の差のように思うと結ぶ。歴史は人間の強かさの積重ねだ。

いずれ雲仙、奥尻も、灰燼の中から不死鳥の如くに蘇ってくると私は信じている。